中国社会科学院蔵青木正児書簡について—胡適との往復書簡

加藤国安

はじめに

青木正児（一八八七～一九六四）は、近代日本の中国文学界の草創期における先駆者である。青木には、「近世戯曲」「文学評論史」「書画論」「名物学」「酒茶論」などの重厚な業績のほかに、個別的な仕事として日本最初の魯迅の発見、文学革命の最初の紹介、中国の新体詩や童謡の紹介、漢文訓読体から漢文直読体への転換の主張などもある。いずれも今日、青木のすぐれた先見性を示すものとして高く評価されている。

青木の没後、その貴重な蔵書・資料は、遺族により名古屋大学附属図書館にほぼ一括して寄贈され、「青木文庫」として三十有余年にわたり保管されてきた。「目録」の件数でいうと三四三点、個々の資料まで細かく数えるとおよそ千数百点。これに中国の知人（胡適・魯迅・周作人・趙景深・王古魯）からの青木宛書簡計八十三点の現物（中村喬氏蔵）の写真（金城学院大学・張小鋼教授提供）なども併せて調査、これらが青木の中国文学研究にとってのみならず、日本の近代的中国文学研究にとっても、どんな意味があったのか、かなり明らかとなってきた。その調査結果は、図録『「遊心」の祝福—中国文学者・青木正児の世界』[1]に示した通りだが、ただ詳細についてはなお調査中の部分が多く、この図録に収めることはできなかった。

たとえば図録刊行後、これまで不明とばかり思っていた青木の胡適宛書簡が中国社会科学院近代史研究所に現存していたことを知った。何よりも意外だったのは、後述のようにそれがじつは影印本として中国ですでに公刊されていたことだった。ただし、この影印本もよく調べてみるとじつは問題があり、青木の書簡の総数を全十六通として数えているが、それだと一通の葉書の両面に書いたとして数えたことになる。しかし、文面や葉書の体裁から見て不自然さがあり、よく調べてみると計十八通かと考えられる（後述）。ともかくも、この世にはもう存在しないものとばかり思い込んでいた書簡が、現存するという事実を知った時は少なからず驚いた。胡適がよくぞ保存しておいてくれたと感謝するばかりである。

その後、同院と何度も連絡を取り合い、この八月、そのすべて

の書簡の写真を幸運にも本学に寄贈していただくことができた。両者の往復書簡は、近代的な中国文学研究の方法論に深く関わるものであり、きわめて貴重な資料である。小稿[2]では、この胡適との往復書簡の全体像、および二人の交流がもたらした新しい方法論について、報告することとする。

一　胡適・青木「書簡」の公刊

筆者が胡適から青木に宛てた書簡を最初に見たのは、前述の張小鋼教授提供の写真、および張小鋼・渡辺幸彦両氏の整理による「胡適致青木正児的信[3]」だった。張氏の写真は、胡適の青木宛書簡（一九二〇～二一まで二年間続き、計九通ある）の現物を、青木正児の長男亮氏と四男中村喬氏の了解のもと、中村氏宅で直接撮影したものである。氏らの「胡適致青木正児的信」は、正確に文字を起こしており大いに参考となる。当初は、この報告書をもとに作業を行っていた。

ただその後、調査を続けていく過程で、じつは両者の書簡のテキストがすでに数種刊行されていることを知った。胡適の青木宛書簡が活字となって公刊された最初は、一九七六～七八年に池田靖「胡適の書簡（一）」、中島長文「胡適の書簡（二）」という報告書[4]で、胡適の書簡を活字と影印で計五通紹介している。またほぼ同じ頃、一九七七年、梁国豪氏が「胡適写給青木正児的信[5]」と題して、その第一信と第二信を取り上げた。だが、これらはまだ一部の報告に過ぎなかった。

それからおよそ二十年。二人の書簡に関する書誌上の大きな出来事が起きた。一九九四年、『胡適遺稿及秘蔵書信[6]』全四十二冊が刊行されたのである。これは胡適の旧寓邸（北京東廠胡同一号）の五大間書庫の「檔案」（北京大学図書館を経て、現在ほとんどが中国科学院近代史研究所に移転されている）を影印した大部なもので、そのうち第十八～二十巻が胡適から他人に宛てて出された書簡、第二十一～二十二巻が胡適と親族間の書簡、第二十三巻～四十二巻が他人から胡適に寄せられた書簡となっている。この中に青木から胡適に宛てた書簡が第四十二巻に「信、片計十六通」（じつは十八通）収められている。だが、両者の往復書簡についてはまだ取り上げられていない。

その一年後、耿云志氏が『胡適研究叢刊』第一輯に、「関于胡適与青木正児的来往書信[7]」という文章を発表。今度は胡適から青木に宛てた書簡も含めて、青木の胡適宛て書簡と併記する形で初めて往復書簡が出版公開されたのである。耿云志氏の記述によると、一九九三年、氏が友人の小野信爾花園大学教授に手紙を送り、胡適に宛てた青木正児の書簡全十七通（原文によると、「青木正儿写给胡适的十七封信」となっているが、この数字の揺れが問題）の調査を依頼したという。すると、今度は小野教授から胡適の青木宛書簡が、青木の令息・中村喬教授のもとにあるという知らせ

が飛び込み、結局、その両方を併載することになった旨記されている。ただし簡体字で表記されている上に、書名や人名・地名などに付けてあった傍線・波線がいずれも《》の記号になっていたりして、書面の全体的体裁が変わってしまっている。書面の雰囲気を感じ取ることまではできないのが残念である。またこの報告の存すること自体が、あまり世に知られてはいなかったようだ。

さらにその一年後には『胡適書信集』[8]上中下が刊行され、胡適の青木宛書簡九信が収められている。なお北京大学出版社の『胡適文集』全十二巻（一九九八）には書簡・日記とも収録しない。一方、人民文学出版社の『胡適文集』全七巻（一九九八）は、第七巻が「書簡」となっているが、青木宛書簡の収録数は六信にとどまる。また近年『北京大学図書館藏胡適未刊書信日記』（清華大学出版社　二〇〇三）という、二〇〇〇年夏に新たに北京大学で発見された胡適宛ての書簡をまとめて公刊した影印本もあるが、残念ながら青木が宛てたものは一篇も録されていない。

また胡適はじつに筆まめな性分で、一九一〇～六二までの間ずっと膨大な日記をつけている。その日記も数種刊行されており、前掲「檔案」の影印本（黄山書社刊）のほか、曹伯言整理の活字本『胡適日記：全編』[9]全八巻もある。その第三巻が「一九一九～一九二二」の部になっているが、一九二〇年の日記に青木のことは一字も記されておらず、胡適の日記の中で青木に言及するのは一九二一年五月十九日の箇所だけである。

張・渡辺両氏の「胡適致青木正児的信」が、先を越されたことは惜しまれるが、しかし、同書中の「趙景深致青木正児的信」「王古魯致青木正児的信」は初公開であり、応分の意義が認められるものである。ともかくも、胡適と青木の往復書簡は今日すべて読めるようになっており、近代的な中国文学研究のあり方を模索する二人の熱き交流がもたらした意味を、我々はつぶさに確認することが可能である。だが、これまで両者の往復書簡の内容について、さらにはそれと「青木文庫」との関係について、一度も取り上げられたことはなかった。その意味を鮮明にするためにも、胡適宛書簡の実態をしっかり押さえる必要がある。

そこで今春、耿云志氏に胡適宛書簡の所在を照会し、もしどこかでこの現物を所有されるのなら写真を寄贈していただけないか、手紙でお願いしてみたところ、幸いにも快諾する旨のご返事を頂戴した。それは中国社会科学院近代史研究所の図書館にあった。以後、閔傑同院図書館長と何度もやり取りをし、そのつど心苦しいお願いばかりを重ねてしまったが、ついに八月、青木の胡適宛書簡の全写真を本学に寄贈していただいた次第である。これを機に、右に掲げた諸テキストを複合的に組み合わせながら、両者の往復書簡による交流の具体的内容、および「青木文庫」との関係を初めて分析、ここにその結果を明らかにするものである。

なお二人で計二十七通もある書簡の詳細は紙数の関係で省略する。その全文と翻訳は、「名古屋大学中国語学文学論集」第二十

輯に掲載するのをご参照願いたい。

二　胡適との交流のきっかけ

一九一七年、周知のように胡適（一九八一～一九六二）は、「文学改良芻議」を『新青年』に発表。それまで使用されていた文語体を廃止、口語体による文学を提唱した。その主張はたちまち大反響をまきおこし、文学革命へと発展していくことになるが、青木正児はこのことに注目、一九二〇年五月、「胡適氏の中国哲学史覗き見の事」（『冊府』第五巻第三号　のち『青木正児全集』[10]第七巻）で、

「からの国ぢや白話ちうものが近頃流行り出したげな」（中略）白話でなければ夜も日も明けぬと云ふ有頂天。その急先鋒は陳独秀と云ふ男が牛の耳を引張つてゐる新青年と云ふ雑誌で、これは三年程前から発刊されてゐたが、白話文体の花火を打ち揚げたのは一昨年あたりからのことのやうぢや。それは此処に評判をせうと存ずる胡適君が洋行帰りのちやき〳〵として北京へ乗込んで、「新青年」誌上に文学的革命を絶叫したのをきつかけに、新し好きな若い者共がわいしよ〳〵と推かけた、正に是れ談笑して之を麾（さしまね）けば天下靡然として公に従ふと云つた塩梅式。陣頭に立つた胡先生の雄姿と云へば、米国のボストンとやら何処とやらで磨き上げた腕に糾（より）をかけて、小説論文は無論、口語体、無韻無平仄の散文的口語詩の新しさ加減には国粋先生方が驚いて目を廻したさうな。それが又若い連中には大もてゞ流行るなんの段ぢやない、「新青年」とそれに続いて「新潮」と云ふ北京大学の若い衆が打つて出た雑誌などでしきりにやつてゐる。偖（さ）てかう前口上を申上げたら、此の「中国哲学史」がどんな物かは略ぼ見当がお付きにならう。胡先生は目下北京大学の英文学かなにかの教授をしてゐるらしいが、哲学研究者としても先覚者の一人である。（中略）胡君は洋学者だけれど、漢学家の血を受けてゐて、其の方の素養も可なりある。米国留学中にも支那学の研究を怠らなかつたと見えて先頃「北京大学月刊」に其の一部分を発表した墨子新詁も留学中の作だと云つてゐる。云々

と、いささか戯画調まじりで紹介した。なぜ青木が胡適にこれほど注目したのかといえば、文中、「此人にして此著あるを瓢公（―青木自身のこと：筆者注）が最も喜ぶ所以は、第一西学に浸潤した新帰朝したハイカラ先生が新らしい頭で自国の古典を研究した点」にあると述べる。青木三十四歳、血気盛んな時期の文章だけにじつに勇猛果敢な筆致である。

猛進する青木は、さらに自身を前へと駆り立てずにはおかない。

同年十月には、「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」という文章で、自ら創刊したばかりの『支那学』という雑誌（第一巻第一号　大正九年）で、その具体的な内容を詳細に紹介したのである。彼自身、中国古典を新しい時代に見合うものにするにはいかにすべきか苦闘していたから、アメリカ帰りの胡適の新鮮な方法論に強い関心を持ったのである。近代的な中国文学とは何か。それを追求する騎虎の勢いは猛々しく、この『支那学』を直接胡適に贈呈するほどだった。すると、その問題意識を胡適もまた強く抱いていたから、早速彼に返事を寄越すのである。それが一九二〇・九・二十五付け（民国九年）の次の書簡である。胡適の青木宛て書簡計九通のうち、これが最初のものである。縦書き、毛筆、罫線なし、一枚。字体は現物（張小鋼氏提供の写真）を忠実に再現した（旧字と簡体字が混じっている場合あり）。□は一字空きを示す。なお胡適の書簡は、傍線と波線が字の左側（縦書きの場合）に付されている。小論では、青木の書簡と合わせて、すべて右側に統一した。

青木先生：

承□先生寄贈支那學第一巻第一號、多謝々々。京都的學者向来狠多研究中國学的、現在我看了這个雑誌、格外佩服。□先生的大文裏狠有過奨我的地方、我狠感謝。但又狠慚愧。現在我正在病中、不能寫長信、祇能寫這幾个字来謝々□先生。並希望□先生把以後續出的支那學隨時賜寄給我。

此祝　　胡適敬上

支那學萬歲！　　九，九，二五。

青木から『支那学』一巻一号を送ってもらったことへの謝辞である。―京都の学者が年来中国学に関して多くの研究をしてこられたこと、この雑誌を見て感服した。また青木の文中、自分のことを非常に誉めてくれている部分があり、感謝に堪えない。が慚愧の念も覚える。現在自分は病気していて、あまり長い手紙は書けない。こんなわずかばかりの謝辞で恐縮である。以後、また支那学が発刊されたら、随時送っていただけるとありがたい―というものである。

三　青木の第一書簡が語るもの―ぞく〳〵する程嬉し

まずは、胡適の第一書簡への青木の返書がどのようなものか見てみよう。影印本で見ると、真ん中の絵（着物姿の女性）の部分と文字とが重なっているため、残念ながら判読できなかったが、中国社会科学院からの写真のおかげですべて判読可能である。以下、同院蔵青木書簡の完全字起こしはこれが初公開となるので、字体はできるだけ現物に忠実に再現し、当時の雰囲気を示すようにした。

（絵入封書、表書：「支那　北京後門内鐘鼓寺／胡適之先生」）

Please excuse me to write this letter in Japanese.

胡適之先生

御手紙有難く拝見致しました。私は此の手紙を御國の言葉で書かうと思ひました。併し其は無益です。却て意味の通じないもの尓になつて了うでせう。□先生の御友達には周作人先生のやうな日本通もゐられますことも知ってゐますから、私は安心して此の手紙を日本文を以て認めます。そ志て其れが今の處私に取って意志を伝へる最も正確な方法だと信じます。只何方かの飜譯を煩はして貴方に通じなければならぬ事を遺憾尓存じます。

（便箋は毛筆、縦書き、絵入り、罫線なし、三枚。四つ折り。封書裏書：「京都市外、修学院村／高野　青木正兒／大正九年十月一日」消印：「PEKING　7・10・20」）

封書の写真は、『胡適遺稿及秘蔵書信』には収録していないもので、今回、同院からの写真により初めて見ることができた。またカラー写真のため、封書・便箋のこの和服の女性の絵をはっきり確認することができる。それは黒い笠をつけ、表地が黒で裏地が赤の着物に緑の帯をした優美なものである。また『秘蔵書信』では分からなかったが、もう一つの発見はこの封書が四つ折りされていたことである。これにより一つ気づいたことがあるが、それは後述する。

青木も胡適同様に、胡適先生という場合はつねに一字（□で表記した）下げてから記している。中国の敬意を示す文体にならったものである。なお耿云志氏の「来往書信」（一九九五）では、冒頭の英文は省かれているが、これは青木が、胡適と同様新しい時代の中国学者たらんとしていることを伝えようとした気持ちの現れであり、英文の有無により相当の差が出てくるから必ず添えなければならない。まさに青木の高ぶった肉声がそのまま聞こえるようではないか。

続けて青木はいう、

胡先生！私は貴方がたの勇ましい革命運動をぞく〳〵する程嬉しく思ってゐました。私は一人で黙って貴方がたの雑誌を此の京都の市中から一里ほど巨つた田舎で前山と對し乍ら讀み耽ってほくそ笑んでゐました。私尓は此の喜びを頒つ可き友が無かったのです。私共の國では支那文学と云へば四書五經か八家文ぐらひか唐詩選の類ばかりと思ってゐる過去の人が多いのです。今でもお國では論語のやうな言葉が話されてゐるのだと思ってゐる連中があるのです。貴方の所謂博物館裡尓葬られ去る可き文学が私共の國では未だ一般の人の頭尓生きてゐるのです。私共二三の同志は彼等の迷夢を醒す可く「支那学」を發刊致しました。そして私は真先尓貴方がた

の勇しい企を彼らの目の前尓展観することを痛快な感じでゐるのです。つまり私は貴方がたの威力を借って私の小さい憤慨を漏した尓過ぎません。私は貴方がた尓感謝します。

胸の内を語り合える友を見つけた青木の高鳴りが伝わってくるようだ。

胡先生！私が十二年前支那文学を自分の行く可き道だと決定して学窓尓憑ると間も無く、私は戯曲小説に親み始めて白話文学の興味を覚えたのです。そしてお國の文壇に白話文学の機運が盛んになるのを待ってゐたのです。林琴南先生の飜譯なんかでは満足出来なかったのです。戯曲研究家として王静菴先生に望を嘱してゐましたが、矢張駄目でした。先生が此地に在住せられた時逢って見ると、頭の古い人でした。（学究としては尊敬す可きですが）貴方がたの出現が如何尓私を喜ばせたでう！

ここで青木は、自分の今の昂揚した思いを胡適にぶつけている。とくに京都滞在中、面識をもつことができた王国維に新しい戯曲研究を期待してきたが、大変尊敬できる学者ではあるけれども「頭の古い人」で、自分の願いをかなえてくれることはなかったという箇所などは、従来あまり知られていなかった点だ。

王国維が来日したのは一九一一年、辛亥革命の勃発により師の羅振玉（一八六六～一九四〇）とともに日本に渡り、京都に居を構えていた。そして京都大学の学者らとともに中国学について交流の場をもったのである。青木が王国維に最初に会ったのは、同年二月の来日まもなくのことだった。二人が帰国するのが一九一九年。この間、京都大学の学者たちは二人と親交を重ね、中国文化への深い愛好熱が生まれていた。青木は王国維の代表的な著書『宋元戯曲史』を読み強い感銘を受け、大きな啓示を受けることになるが、ただそれほどの学恩を受けていながら、不思議なことに「青木文庫」には、その後、王国維と書簡を取り交わした形跡がない。寄贈本として、初対面の折に贈られた『曲録　附戯曲考源』があるだけである。この時から二人の間に微妙な感覚的ズレのあったことは、「王静庵先生の追憶」（『青木正児全集』第七巻）に記されている通りである。そして青木の王国維に対する失望が明確になるのは、一九二五年、彼が北京留学中に王国維を訪ねた際、王国維に「自分は先生のされた元曲研究の後の明清戯曲史をしたい」と告げた時、意外にも「明以後は取るに足る無し、元曲は活文学なり、明清の曲は死文学なり」と、冷語されたことによると一般的には考えられてきた。しかし、この自筆書簡により、胡適の新鮮な方法への熱烈な思いもあってのことだろうが、じつは京都滞在中よりはや王国維に対して「頭の古い人」で、新しい研究を嘱望することは「矢張駄目」という印象を、青木が抱いて

いたことが生々しく確認されるのである。

書簡は、最後に「「金冬心の藝術」と云ふ小冊子を今製本中ですから、出来次第お目尓かけやうと思ってゐます」と述べた後、若干の文章をもって終わる。第一信の後付は、「十月一日夜　青木正兒」とある。そしてこの後に、ある一つの資料が添えられている。前掲の「胡適氏の中国哲学史覗き見の事」を雑誌より抜き取ったもので、冒頭部分には、青木の毛筆細字で「此の一篇は以前さる書肆から書目雑誌尓新刊紹介として起草したものです。戯文ですがお笑ひ草尓お目尓かけます」と記されている。

この資料自体は影印本『胡適遺稿及秘蔵書信』にも録されていたが、中国社会科学院から送ってもらった写真で確認すると、便箋と同じように四つ折りされている。この折れ具合もカラー写真のおかげで、今回初めて判明したものである。中国社会科学院が、この封書に同封されていたと認めるのは、この折れ具合も根拠となっていよう。

否、それ以上に大きな新発見があった。二～四頁めにかけて数カ所赤鉛筆で線が引いてあったのである。これは影印本では映っていない。たとえば、次のような箇所。

> 此人にして此著あるを瓢公が最も喜ぶ所以は第一に西学に浸潤した新帰朝のハイカラ先生が新らしい頭で自国の古典を研究した点第二には大学の講義を終ると早速印刷にした点である。

八

> 関係の無い書物なら矢鱈に書かれる手あひの先生が事本職のノートに関するとあれば黙して世に示さゞること無知なるが如しの有様は御同情申上げまする。是を思ひ彼を思へば驀地に猛進する胡氏の痛快さは如何にも嬉しい。
>
> 概評を下せば従来日本や支那で出版された同類の著書に比べて研究法が大分科学的に進んでゐることである。

青木が胡適に抱いた最初の印象がどんなものだったかを、ぜひ知ってもらいたかったのだろう。意図する所が明瞭に分かる。

その返事を待ちきれなかったように、青木は胡適への第二信をしたためる。しかも今度は中国語で書いている。翻訳を介さずに直接、胡適に自分の思いを届けたかったのだろう。便箋は深緑の「守拙蓬廬」の銘入り、縦書き、毛筆、十行の罫線あり、五枚。

> 胡適之先生
>
> 此奉呈鄙著金冬心之藝術和品梅記各一部。（中略）只因我生平頗講究支那戯曲的原故，朋友勧我起草概論的一篇做一卷導言；所以我把崑曲的沿革大要匆々説過，以塞責任了。雖然很杜撰没有一顧價値，見在我要在支那学誌上，介紹□先生們大家討論改良旧劇的地方，所以把這個書籍，寄給□先生供一興。
>
> （中略）

我很希望□先生們鼓吹建設新文藝的人，把中國的長所越々發発達，短的地方把西洋文藝的優所拿来，漸々翼補，可以做一大新々的真文藝。很々熱望，很々嘱望。Good night！

青木正兒

九，十，二六。

冒頭から自著『金冬心之芸術』『品梅記』を献呈したいと述べ、自分の今後の研究目標が中国戯曲の原型たる崑曲の探求にあることを告げる。そして、友人の勧めもあってその序論として『支那学』に発表したので、それを贈呈するという。ついては、旧劇のどこを改良すべきか、先生方の意見を『支那学』に紹介したいと。末尾で青木は、中西融合による新文芸建設への熱い期待を寄せて、この手紙を結ぶ。「Good night！」が目を引く。米国帰りの胡適への親愛の情のこもった言葉であり、青木の昂揚した気分をよく示している。

四　胡適の『嘗試集』の「純なる心」—改革の気概の伝播

さて、胡適の第二信め（一九二〇　民国九年）にいわく。横書き、ペン字、罫線なし、三枚。

青木先生：

承□先生寄贈的支那学二号，金冬心之藝術一册，品梅記一册，都已収到了。我狠誠懇的感謝□先生。

我的病還不曾全好，故久没有寫信荅你的両次長信，請□先生原諒我。（中略）

両册支那学都借給周作人先生兄弟看去了。（他的哥哥周豫才，假名〃魯迅〃，也是深知日本文藝的人。）他們也狠喜歓這个雑誌。

我曾寄嘗試集再版一本給□先生，不知□先生収到了没有？

先生叙述中國的文学革命，取材狠確当，見解也狠平允，——只是有許多過奨我個人之處処——周先生想譯成漢文，但因此文尚未完了，故不曾動手。

病中不能多談，先表我感謝的誠意，并祝□先生安好。

胡適

九，十一，十一。

青木が続号の『支那学』一巻二号を送ったところ、それを胡適が周作人兄弟に貸すのである。そして胡適いわく、彼の兄のペンネームは魯迅といい日本文学にも関心が深く、この種の雑詩を喜ぶからと。このことが青木の耳目をさらに引き、直接魯迅とやりとりをしてみたいと思わせたことは疑いない。この折の胡適への返信に魯迅宛ての書簡を託しているからである。そのことは、『魯迅全集』（人民文学出版社　一九八一）第十四巻「日記」の一九

二〇年の箇所に、「十一月二十七日　下午得青木正児信、由胡適之転来」とあり、郵便に要する日数からいって、この返信が「胡適より転じ来た」ものだったと推測できる。ちなみに『魯迅手稿全集』（文物出版社　一九七八～八三）の「日記」において、端正な筆跡でしたためられた同文章を確認することができる。

また胡適が、最初の書簡で一緒に自著『嘗試集』（民国九年亜東図書館排印本）を贈っていたことも、「我曾寄嘗試集再版一本給□先生，不知□先生収到了没有？」と確認を取っていることから分かる。しかし、胡適の第一信に対する青木の第二信を読むと、何も言及がない。自分の思いを述べるのに夢中になるあまり、まったく失念してしまったのである。この十一月十一日付の胡適書簡は、おそらく二十日頃に青木の手元に届いただろう。その点を尋ねられるやいなや、恐縮しきりとなる青木の顔が目に浮かぶようだ。青木はただちに返書（胡適への第三信）を出している。後付は「正兒／十一月二十日。」となっているから、慌てふためいて出したようだ。便箋は縦書き、青色ペン字、花の絵入り、二十字×十行の原稿用紙三枚。影印本とちがい送られてきた写真は、文字がすべて判読できる。

胡適之先生。

承□先生寄贈的大著嘗試集出版，已収到了。多謝々々！因為那時我已給□先生寄第一次書信了，所以我想俟後来敬贈鄙著的時候，更寫一信，要致謝意。不意到寫第二次的信時我全忘了。死罪々々！

先生の『嘗試集』はすでに拝受していたけれども、あの時は最初の手紙だったこともあり、自著（『金冬心之芸術』）を敬贈するのを待って謝意をいうつもりにしていたのが、第二信のときにそのことを完全に忘れてしまったのだと。「死罪々々！」の言葉も生き生きと感じられる。

「青木文庫」に所蔵されている『嘗試集』を手にとって見ると、表紙見返しの遊びに「胡適敬贈／九，九，二七。」と、胡適による自筆署名がある。『嘗試集』には初版（民国八年八月一日）と再版（民国九年八月十五日）とあるが、「青木文庫」蔵は、胡適が記すように再版本である。『嘗試集』は胡適の新体詩を集めたものだが、青木はこれについてもすでに「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」の中で、こう紹介している。

胡君が茲に火の手を揚げる迄には可なりの熟考と研鑽とが費された。少しの衒気も山気もない純なる心と、熱烈なる欲求と、真摯なる態度とを以て飛躍の準備が急がれてゐた。決して突如として躍り出た人騒がせな気まぐれ者では無かつた。それは最近出版した詩集「嘗試集」の自序に可なり細しく其の経過が述べてある。勿論之は主として彼の新詩製作に

関することであるが、一般の文学革命に就ても其の詩論発生の経路を見るに足るのである。

民国前二年 彼十九歳の時 米国に留学した。段々と新しい欧米の文学に親み行くと共に、彼の眼は益々開けて来た。初は農学を修め、後には政治経済文学哲学を修め、専ら文学を修めたわけでは無かつたが、好きであつた為に可なり文学書は耽読した。で此頃の作詩には少からぬ西詩の影響を蒙つた。それは「嘗試集」に附録してある「去国集」在米中の詩集 に因つて窺はれる。

青木のこの文章を読んだ胡適がその慧眼に感心し、記念として再版本を贈ったことが分かる。本を開くと、青木が「一顆星児」「威権」「我的児子」「楽観」などの作品に赤丸を付している。このうち「我的児子」は、青木の訳が「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」の（附録）に載せられる。大正十年四月の発表だから、この寄贈本を読んでのものだろう。

胡適の新体詩に刺激を受けた青木は、以後口語体の中国詩を積極的に紹介することとなる。そしてそれがまた彼自身の漢詩の翻訳の際、口語訳詩の推進という形に繋がっていく。もう一つ、直接的な影響ではないが、文学革命の実践書たる『嘗試集』の熱気が青木に乗り移った事例として、自らの新提言たる「漢文直読論」への自信を深めたという点もあったかと思われる。なぜならば、続く第四信（九、十一、二十八）にこの「漢文直読論」が切り出されているからである。便箋は「守拙蓬廬」の銘入り、縦書き、毛筆、十行の罫線、三枚。

我們日本人的讀書法，把中國文牽強日本的文法，迂回環讀，字音也是千年以還轉訛的漢音，——没有四声的別，音韻不諧的。因為這箇原故，我們所求支那学的時候，不便不少；就中研究韻文為尤甚。我的誤讀，雖然全據我的淺学，而尚一壁相被惑于這箇偶像了，慚愧々々。我們応該廃棄這（ママ）個偶像，学今日的中國音讀法；否則我們的讀書力，進歩不可企及：這是日本支那学者流的改進第一歩。我常持此論，而還没有遑実行。

これは「本邦支那学革新の第一歩」という『支那学』一巻五号（大正九年十月）に載った文章を、胡適にも表現を変えて披瀝したもの。「這是日本支那学者流的改進第一歩」が、当時の青木の意気込みをよく伝えている。後、青木自身により「漢文直読論」と改題されるが（『青木正児全集』第二巻『支那文芸論藪』の青木「自序」）、その結論にいわく、

漢文は全然支那音読に依り、漢音呉音は之を古音として皇国古典研究者たる特殊の人々の手に委ねて了ひたい。何れにしても直下音読は目下の急務だ。現今支那学専門家の大多数

が、無意識の間に直下黙読を行ひつゝあるは吾々の経験から推測出来る。併しともすれば、視線が転倒したがる。更に一歩を進めて之を音読に及ぼし、目も口も頭も転倒しないやうに習慣を付けたら、読書力が大いに増進するに違ひ無い。

たまたま同時期に「漢文直読論」を発表したところへ、胡適からの熱い思いが直接届き、ますます改革の炎が燃え上がったのだろう。胡適の『嘗試集』の読後感の代わりでもあるかのように、「漢文直読論」をぶち上げるのである。ちなみに、この論文が倉石武四郎を感動させ、東大から京都大学に転ずる契機となり（『中国語五十年』岩波新書）、それまで外交や民間経済において細々と行われていた中国語教育ではあるが、それと並行して古典文献（漢文）においても初めて本格的な中国語直読法が始まることを思えば、いかに青木と胡適の共振する魂が、時代の最先端を切り拓く力になっていったかがよく分かる。

さて、この第四信の末尾にこんな興味深いことが書いてある。

見在我的支那語学狠幼稚，讀白話文尚不能盡用華音，況且古文哪！遺憾々々！

料我的白話書信，文章很不完全，訛誤不少，文字文法也多有不妥貼的地方，常恐□先生難通。

此謝□先生的懇切誘掖，謝々！餘話容後談。

青木正兒

九，十一，二十八。

すなわち、「中国語直読法」を提唱するものの、自分の中国語は不十分でこの手紙も間違いが多いのは遺憾であり、胡適先生の懇切な教えを請いたいという。青木が自ら中国語でしたためた時の心情を髣髴させる。

五　胡適の近代的な『儒林外史』『紅楼夢』研究—独見の評価

次に、青木の第四信への胡適の返事。縦書き、毛筆、罫線あり、十七行、六枚。

青木先生：

九，十一，二八的信使我狠歓喜。因為□先生不但不怪我狂妄，反因此提出日本「支那学者」応改用中國音讀法的論文，這種態度是我所深佩服的。（中略）

你的白話信，我全看得懂。偶有一両處狠微細的錯誤，——例如「還没有遑実行」的「遑」字太文了，——但都無妨碍。我若能把日本文学到這樣通順的地歩，我就真要高興極了。

支那学四期已到了。謝々。

我有幾件關于支那学的事要請□先生和□先生的同志幇忙，不知可以嗎？

第一，（中略）

第二，支那学第三号上有内藤先生作的章実斎年譜一篇。我也是愛讀章氏的書的人。但章氏遺書此時狠不易得。文史通義之外的遺文，我僅搜得四五十篇。

内藤先生説他去年得鈔本章氏遺書十八册。這一句話引起我的「読書饞涎」不少！内藤先生是否有意刊布此項遺書？若一時不可刊布，他能許我借観此書的目録嗎？（中略）請□先生替我問一問内藤先生，好嗎？（中略）

另寄上儒林外史一部，奉贈□先生。我本想為此書作一篇考證，不幸我病了，故只能用一篇舊傳塞責，慚愧々々！

胡適。

九，十二，十四。

冒頭部は、青木の『金冬心之芸術』中の「双会曲」の句読の誤りを、胡適が第三書簡（九、十一、十八）で指摘したことを踏まえてのやり取り。青木は胡適の「狂妄」な指摘をいぶかるどころか、かえって謙虚に自分の誤読を認めた上で、その原因が古来の漢文訓読法にあるのであり、そこからの脱却が必要という。そうでなければ、本を読みこなす力はつかないと（我們応該廃棄這個（ママ）偶像，学今日的中國音讀法：否則我們的讀書力，進歩不可企及）。

青木が日本でも新しい「中国音読法」を用いるよう「日本「支那学者」」に提出したことに、今度は胡適が「歓喜」する構図は、それぞれの抱える文学革命への連帯感を端的に示している。また青木の中国語についてもすべて読めることを伝え、むしろあなた（が中国語・中国文学をよく理解できる）くらい、私も日本文学を理解できたならどんなにうれしいことかと励ますのである。

次に、胡適は『支那学』に掲載された内藤湖南の『章実斎年譜』一篇を読んで、湖南が『章氏遺書』十八冊を有していることを知り、「よだれを貪る」ほど見たくなったと記す。――内藤先生はこの『遺書』を刊行されるおつもりはあるのかどうか。もし当面ないのであれば、その「目録」だけでも見せてほしい。このことを貴方から内藤先生に尋ねてもらえないかという。これがどのような結果につながったかは後述（第六章）することにして、その前に胡適が青木に『儒林外史』を贈呈したことについて見ておく。

この『儒林外史』上下も、現在「青木文庫」に所蔵される。見返し遊びには「敬呈／青木迷陽先生／胡適　九，十二，十四。」と自筆署名される。民国九年（一九二〇）の贈呈本（上海・亜東図書館）である。胡適は近代中国の中でも、いちはやくこの『儒林外史』に注目、世に紹介した人物だった。青木は鋭敏な感性ですぐその慧眼を洞察し、書中、随所に朱の印を付けて読んでいる。

青木の第七信（郵便葉書で「支那、北京、後門内／鐘鼓寺／胡

適之先生」と表書きされる）には、「先生ご寄贈の『儒林外史』が届きました。ちょうどこの本を購入しようとしていた折ですので、心より感謝申し上げます。先生の呉敬梓伝を暇を見て一読、先生の文学眼のすばらしさに深く感服しております」（原文は中国語。九、十二、廿一付）と、短い感想が寄せられている。

その詳しい読後感は、「儒林外史を読む」と題して一九二一年『支那学』一巻七号（大正十年三月）に発表。その冒頭にいわく、[11]

「儒林外史」の名を聞いてゐたことは久しいことであつた、併し恥し乍ら今日まで読んだことは無かつた。以前「新青年」紙上で白話文学が議せられ初めた時、此の書の価値が銭玄同・胡適諸氏によつて「水滸」「紅楼夢」と比肩すべきものだとして評価されてゐるのを見て、私の食指は少しく動き始めたが生憎其の書を手にする機会に逢は無かつた。（中略）私が此の名著に対して後れ馳せ乍ら文学眼を開き得たのは、全く支那新文学唱道者諸君の賜物であると私は感謝する。

かくして、一九二五・二六年の江南旅行の際には本書を「旅行案内に代へて携帯」（『江南春』）しながら旅をした。そうすることで、小説の中に出てくる江南を一つ一つ確かめながら古今の思いに浸ったのである。もし胡適のこの贈呈本なかりせば、あの名著『江南春』もよほど違ったものになっただろう。

ちなみに、「銭玄同・胡適諸氏によつて…評価され」た『紅楼夢』だが、これについて青木は「胡適著「紅楼夢考證」を読む」を（『支那学』一巻十一号　大正十年七月）発表。その冒頭部にはこう記される、[12]

昨年以来、殆んど小一年も病気の為に学を廃してゐた胡適之君の工作に再び接し得る時機の到来したことは、喜ばしいことである。此の一篇は例の上海、亜東図書館から最近出版された「新式評點紅楼夢」の巻頭を飾る為にせられたもので、同書が出るや否や、著者から『九個月来，只有這一篇文章，可愧々々！』と云つて寄贈に預つた。量に於て五十頁、内容も精細を極め、集大成的消化力と建設的独創力とが生んだ快（ママ）心の著である。

何時も胡君の研究を見て爽快を覚える点は、前輩の説を捜羅することを怠らぬと同時に、決して木乃伊取りが木乃伊に為ること無く、きつと其の上に自己の独見を築き上げてゐることである。此の考證に於ても果して彼は一箇の傾聴に価する独見をだしてゐた。僕の期待は外れ無かつた。僕は是非其れを読者に紹介せねばならぬ。

と。胡適から贈呈されたのは『新式評點紅楼夢』だった。しかし、残念なことに本書は現在「青木文庫」にはない。が、ここでも青

木は直接その書を通して、胡適の「集大成的消化力と建設的独創力」による爽快な刺激を存分に浴びつつ、近代的中国学の扉を次々に押し開けていったことが窺えるのである。

その胡適の新説とは、『紅楼夢』の世界は清朝朝廷の中に誰か特定のモデルがいたわけではなく、ほかならぬ作者曹雪芹自身の「ありし昔の栄華の夢を追憶して書いた一部の自叙伝であると断定する」ものである。かくて青木はこう快哉を叫ぶ。「胡君の此の推定に対して、僕は多年の疑問が一時に解決されて、頭が頓にクリヤアになつたやうな気がする」と。この文章の中でもう一つ興味深いのは、青木の次のコメントである。

> 夢から覚めて自己を客観視し得た時にこそ、始めて自叙伝的大芸術は生れて来る。僕は常にかう思つてゐる、『大なる芸術は自己の分身である、自己の外延である。自己の現れ無しに大芸術は決して成立し得ない』と。

青木のこの「常」なる確信は、どこから湧いてきたのだろう。右の文章が発表されたのは大正十年である。その前年はというと、青木の代表作『金冬心之芸術』が刊行されている。青木が金冬心を「自己の分身」として捉えていたことは、既に述べた通りである（「文人画とは詩情にあり—青木正児の世界デッサン」『「遊心」の祝福—中国文学者・青木正児の世界』）。すなわち青木自身、金冬心との一体性の客観化において、「始めて自叙伝的大芸術」が生まれてきた経験を有するのであり、同様の境地から曹雪芹の『紅楼夢』も生まれたのだと得心したのである。青木が胡適の新説に深く共鳴したのは、まさに自らの到達した文学観・芸術観の共有者にして代弁者であると思われたからにほかならない。

ところで、前掲の胡適の第二信（一九二〇・十一、十一）を再読すると、青木は胡適に「《金冬心之藝術》一冊」を贈呈。その後、両者間で金冬心の文学・芸術をめぐって何度か手紙がやりとりされるが、それは「西洋詩人提倡的〝Imegism〟（影像主義）」（胡適の第三信、二一、十一、十八）の応用として青木の議論を評価するものだったり、また金冬心の新体詩への関心だったりする。直接、青木の研究スタイルが胡適の『紅楼夢』新論に刺激を与えたか否かはともかくも、彼の近代的な方法が胡適の共感を得ていたことは、たとえば胡適の第二信の半ばほどに、こう記されることに示される。

> 先生希望我們〝把中國的長處越々発達，短的地方把西洋文藝的優所拿来，漸々翼補，可以做一大新々的真文藝〟。這真是我們一斑同志的志願。但我們的能力太薄弱，恐怕破壊有餘，而建設不足！

中国の長所を伸ばし、その短所は西洋文芸の優れた点により

補って行きながら、新しい真の文芸を作っていこうという、青木の力強い提言に同意しながらも、胡適は今の中国はまだ「能力太だ薄弱」で、もし急激に改革を行えば「破壊すること有余」となることへの不安があった。その葛藤に加えて、胡適は「昨年以来、殆んど小一年も病気の為に学を廃してゐた」。そうではあるけれども、青木の激励は確かに一つのエネルギーとなり、かくて日夜『新式評點紅楼夢』に打ち込んでいたのではないか。胡適の「紅楼夢考證」が脱稿したのは、一九二一年三月のことだった。この間およそ八ヶ月、もし胡適の脳裏に青木の言葉があったとすればうれしい限りである。

六　胡適の『章実斎年譜』――「青木先生の幇助に感謝」

少し前述したが、胡適は『支那学』に掲載された内藤湖南の『章実斎年譜』一篇を読むや、湖南所蔵の『章氏遺書』十八冊をぜがひでも閲読したくなり、湖南がこの『遺書』を刊行するつもりがあるのか。もしないのであれば、その「目録」だけでも見せてもらえないか、湖南に尋ねてほしいと青木に依頼してきたのである。そうと知った青木の献身的な協力は特筆に値する。

まず青木の第六信（郵便葉書、横書き、青色ペン字、罫線なし、一枚）にいう、「章氏遺書的事，不日我應該問一問内藤湖南先生，再寄□先生知道」（「青木正兒　九，十二，二十一。」付）と。同院蔵の写真を見ると、表書きはただ「支那、北京、後門内／鐘鼓寺／胡適之先生」とだけある（消印「9・12・21」）。だが影印本では、これが下半分にも文書がしたためられていて（この写真のみ未受領、散佚による）、縦書き、ペン字で、後付はやはり「九，十二，廿一。正兒」となっている。これは九，十二，二十一付の葉書が二通あるのだろう。後者の葉書の冒頭に「剛纔我寫了郵片、投了郵函裡；忽然□先生恵贈的儒林外史来到了」と書き始められ、胡適から『儒林外史』が届いたので慌てて続便をしたためる旨のことが記されていることより、そう理解される。よってこれを仮に第七信と見ておく。ただし影印本では裏が示されないから、絵葉書なのかと思われる。

追いかけるようにして第八信（「正兒／九，十二，二十五。」付、便箋は赤色の守拙蓬廬の縦の銘入り、毛筆、二十五字×十行の原稿升目、六枚）を送り、「関於□先生下命的章氏遺書之件，昨天我到内藤先生的家，不幸他上東京去，所以遂問不得了。料想刊布這書現在可不能実行：――日本漢学界還在狠低級的地歩，那文史通議一書尚且讀者絶少，何況其他章氏的遺書呢！」と、湖南先生の宅に行ったが、残念ながら湖南先生は上京のためお尋ねすることはできなかった。しかし、思うに刊行はとても無理だろうと告げる。かくて青木は後日湖南から『章氏遺書』を借り出し、せっせとその「目録」すべてを写し取って、それを胡適に送ったようなのである。

ようというのは、青木の第十信（第九信は影印本には収録されず、本学への寄贈写真による。これは年賀の絵葉書で虚無僧の解説をしているのみ。第十信は「青木正兒／十，一，二十七。」、ペン字、絵入り、二十字×十行の原稿用紙一枚）に、「胡適之先生：我想章氏遺書目録你已収到了。」と記されるからである。そればかりではない。続けて「後来内藤先生寫別種章氏著書書目—他所蔵的—使我知道你，所以以一共封入在此」と記し、湖南が後に「別種の章氏の著書書目を写して、これも貴方に知らせるように」と言われたのでと、それも同封するほどだった。

これに対する胡適の返信（青木宛第七信：「適／十，二，三」付、縦書き、毛筆、罫線あり、八行、九枚）だが、「青木先生：你的手鈔本内藤先生蔵本章氏遺書目録，已収到了。我不知道應該怎様謝你的熱心与高誼！我一定保存此書，作為我們友誼上的一件紀念品」という。青木の熱情になんとお礼をいえばよいのか分からない。これは二人の友情の証としてずっと保存したいというのである。胡適はこれに先立ち、杭州の浙江図書館に鈔本『章氏遺書』があることを調べ出し、人にお願いしてその目録を写してもらおうとしたが、もう鉛印本が出ているという。そこで早速入手（湖南にも贈呈、以上青木宛第六信に記す、「適／十，一，二四。」付）、自らその目録と内藤蔵『章氏遺書目録』とを比較したところ、内藤本の方が収録する作品が多かった。そこで胡適は青木にこう依頼する。「以上各篇中，若□先生能設法使我得讀禮教所見両篇，我就感激不盡了。其餘各篇，似不甚重要」（第七信）と。青木先生、どうにかして「礼教」「所見」の二篇を読ませていただくわけにはいかないものかと。青木もすぐ返事（胡適宛第十二信：「青木正兒／十，二，十七」付、便箋、縦書き、毛筆、罫線なし、十行、九枚。なお第十一信は別件の郵便葉書　十，一，二十九。）を送った。「内藤本多出的「礼教」「所見」二篇，我已經借来了，不久應寫着寄上你看」と。青木は「礼教」「所見」の二篇をすべて書写して送ったのである。胡適からのその返事はないが、一年後に刊行された胡適著『章実斎年譜』（中華民国十一年一月初版　商務院書館）の「自序」には、こういう、

我這部小書的編成，很得了許多認得或不認得的朋友的帮助。我感謝内藤先生的年譜底本，感謝青木先生的帮助，感謝浙江図書館館長……。

と、青木の協力に深い感謝の辞を記すのである。今、「青木文庫」には、この時胡適から贈られた『章実斎年譜』が存し、その表紙に「敬贈　青木先生／胡適」と自筆署名が入っている（書込なし）。手に取ってみると小さな本だが、二人の友情は世界級であると、その字が誇らしげに語っているようである。

七　胡適の『水滸伝』成立考―青木との共同作業

じつはこの時、両者の間では並行して『水滸伝』の成立をめぐる活発なやりとりもあった。二人の旺盛な研究心には唖然とさせられる。この『水滸伝』をめぐる往復書簡こそ、彼らにとってのみならず中国近世小説史研究にとっても最も実り多いものだった。順を追って見ていくと、まず胡適が「水滸伝考證」を発表したのが一九二〇年七月二十七日のことである。それを青木は同年のうちに読んでいる。そのことは次の一節で分かる。(13)

「水滸伝」が何時出来たかをはつきりと断定し得る確證は容易に見出されまい。一般には元代の著だと見做されてゐるが、既に清初の周亮工は明初洪武頃の作だらうと目星を着けてゐるし、先年狩野直喜先生は水滸伝説を扱つた戯曲との比較研究からして周氏の明初説に裏書された。「芸文」一ノ五。「水滸伝と支那戯曲」参見　昨年胡適氏も亦別に之と全く同様の方法で、もつと精密に「水滸」製作の径路を考證して明の中葉まで時代を引き下げてゐる。新式評點「水滸伝」を見ょ　僕は胡君の説に多少賛同しかねる点はあるが、大体に於て服する。（「水滸伝が日本文学史上に布いてゐる影」『支那学』一巻九号　大正十年五月）

ここで「昨年胡適氏も云々」と述べるのは、大正九年（一九二〇）のことである。その内容を青木はこう評す、「其中で「水滸伝考」と「紅楼夢考證」とは出色の議論で、前人未発の独見を出してゐる」（「胡適を中心に渦巻いてゐる文学革命」の附記）と。青木がそれを読んでじきに胡適に感想を書き送ったことは、第三信（「正兒／九，十一，二十。」付）を見ると明確である。

我讀□先生的大著水滸傳考證很佩服。前數年，我師狩野君山直喜先生亦有同一議論；也把元曲的水滸傳説比較小説的水滸，他的結論以水滸為明初做；今□先生降之明中葉，蓋同工異曲。（中略）我把□先生的高論告訴君山先生，君山先生狠高興；所以把那大著借給君山先生看去了。君山先生［很推］稱□先生的頭腦明晰。

まさに熱烈な手紙だが、これへの胡適の返事は同年の第四信（「胡適。／九，十二，十四。」付）である。

第三，□先生前函曾提及令師狩野先生的水滸考，又蒙先生許我搜求登載此文的藝文雜誌。此文我極想拝讀一遍，若蒙□先生代覓得那一号藝文，千萬寄我一看！

「又蒙先生許」が一字開けになっていないのは、現物の方が「先

生」で行変えしているため。また「令師狩野…」も、「提及」の後に余白を残して行変えしている。――ぜひ狩野先生の『水滸伝』の論文が見たい。ついては『芸文』を送ってもらえまいかというものである。勿論、青木はすぐ対応した。胡適宛第八信（前掲「正兒／九，十二，二十五」付）にこう記す、

狩野先生的水滸傳考曾經登載藝文第一年第五號，（明治四十三年八月――宣統二年）我丟了此號，坊間也容易求不得，我想很遺憾；可是□先生若不厭一見之後返擲我的煩，就我借朋友的，寄□先生送罷！不知貴意如何？

少し以前の雑誌なので今は手元にない。巷間でも入手は容易でない。もし胡適先生が返却の煩わしさをお厭いでなければ、友人から借りて送りますがというのである。これに対する胡適の返事はないが、青木は『芸文』を友人から借り出し送付している。そのお礼は、胡適の第六信（「適／十，一，二四。」付、縦書き、毛筆、罫線あり、十七行、三枚）にこう記されている。「藝文第一年第五号，倘蒙□借観，我定謹慎収蔵，閲畢即寄還你。」と。相互の日付からすると、互いにそう間をおかずにやりとりしていることが分かる。青木の送った狩野直喜の論文が胡適を喜ばせたことは、胡適の「水滸伝後考」（十，六，十一脱稿）にこう記される通りである。[14]

青木先生又借給我第一年第五期《芸文》雑誌（明治四十三年四月），内有日本京都帝国大学狩野直喜先生的《〈水滸伝〉与支那戯曲》一篇。狩野先生用的材料――従《宣和遺事》到元明的戯曲――差不多完全与我用的材料相同。他的結論…（中略）。这个結論也和我的《〈水滸伝〉考證》的結論相同。这種不約而同的引証使我非常高興。

しかし、じつは青木の第八信はそれ以上に胡適にとって重要なことを記していた。

日本正德 享保時（自康熙末年，至雍正）有一位研究支那白話文学的先覚者，姓岡嶋名璞字玉成號冠山；他観了許多小説，極精通了白話。我要做他的小傳，略考一考了；（中略）我見得的四種，所蔵的三種。其他還有忠義水滸傳二卷，自第一回至第十回，附訓点刊布；通俗忠義水滸傳七十卷，把聖嘆百回本完全翻譯，通俗皇明英烈傳二十三卷，…。

青木はこの手紙に関連することを、前掲「水滸伝が日本文学史上に布いてゐる影」でも述べているので、いま関係部分を引用する。

続いて一人の「水滸」学上の恩人が現はれた、それは岡島

冠山（延宝三年～享保十三年）である。（中略）彼は三十歳頃 宝永元年の頃 京都に来遊して支那小説の翻訳を書林と約し、「水滸」の訳にも着手したらしい。遂に彼は此の事業を完成した。併しそれは彼の死後四十余年を経て宝暦七年にやつと刊行された。即ち「通俗忠義水滸伝」七十巻である。（中略）此の以前に彼の仕事として今一つの「水滸」が世に紹介されてゐる。それは李卓吾の百回本に訓点を施して刊布したもので、初板は第十回まで享保十三年に刊行されたが、其年彼は遂に其の完成を見るに至らずして世を去つた。

この話は胡適にとっては大きな驚きだった。その時の胡適の狼狽はいかばかりであったか。なにせ彼の「水滸伝考證」は、七十回本『水滸伝』数種のみを見ての立論だったからである。胡適はいう、「我去年做考證時，只曾見着幾種七十回本水滸，其余的版本我都不曾見着」（前掲「水滸伝後考」）と。そこで胡適は、第六信でこう問い合わせるのである。

先生説岡鳴璞（ママ）的著作中有『忠義水滸傳二卷，自第一回至第十回，附訓点刊布』此本是否聖嘆批本？若是明本百回本的前十回，我極想得着一部。不知能求得着嗎？

明代之忠義水滸傳（百回本）不知在日本尚可購買嗎？如能購買，我極願買一部。

「明本百回本の前十回なら、ぜひ手に入れたいが、求められるかどうかご存知ありませんか？」「もし明代の『忠義水滸伝』（百回本）が日本で購入できるのなら、ぜひ買いたい」と、青木に強く懇望。勿論、この時も青木の対応は早かった。二月三日付で、「明本百回本的前十回」と「明代之忠義水滸傳（百回本）」を送ったらしい。らしいというのは青木の二月三日付の書簡が、耿云志氏の報告にも例の影印本にも中国社会科学院からの写真にもないからである。しかし幸いにも、青木宛第八信（「胡適／十，二，八。」付、縦書き、ペン字、十二行×二十七行の原稿用紙、四枚）に、胡適の感謝の言葉がこう記されていることで、それが確認できる。「青木先生：謝々你的十，二，三的信，与你寄贈的忠義水滸傳二冊！這両本水滸傳使我非常歓喜」と。ただし、明刻百回本は簡単にあるわけもなく、その代用として「百回本忠義水滸伝的日本訳本。岡島璞訳，明治四十年東京共同出版株式会社印行，大正二年再版」（胡適「水滸伝後考」による）を送ったのである。

この間、わずか二週間にすぎない。二人の熱い思いが伝わってくるかのようである。このお陰で、胡適の『水滸伝』成立論は飛躍的に精度を高めることとなる。ことの次第は、「水滸伝後考」に詳しく記されているが、胡適が「水滸伝考證」を発表したのが一九二〇年七月二十七日。この時、胡適が七十回本しか見ていなかったことは、前述した通りである。にもかかわらず、百回本を含めて『水滸伝』成立の概略を解明しているのは驚きというほか

ない。ただ具体的に版本を見ていないため、隔靴掻痒のもどかしさを抱えたまま仮説として提示するしかなかった。そこへ青木から、日本には百回本があるという情報が寄せられた訳だから、飛び上がるほど驚嘆したことだろう。

前述のように青木が送った百回本『忠義水滸伝』は、「岡島璞訳，日本明治四十年東京共同出版株式会社印行，大正二年再版」だった。これだけでも胡適には「可宝貴」（後掲「水滸伝後考」を参照）だったが、しかしその底本の明刻百回本『忠義水滸伝』が日本にあることを知るや、胡適はこの明刻百回本『忠義水滸伝』（万暦年間に杭州の容与堂が刊行したもの）を、ぜひとも知りたくなった。青木の難儀への謝礼として、第八信でこうも述べている。

我新得的百十五回本水滸傳，頗像你来書説的某氏所蔵二刻英雄譜，也是一部三国水滸合傳：上欄為忠義水滸傳，下欄為三國演義。這書又名漢宋奇書。此間没有此書的好版本，但頗可供我的参攷。倘蒙你替我訪得一部百回本的忠義水滸傳，我就真要歓喜欲狂了。百十五回本的，我不久当當寄一部贈送你。

最近自分は百十五回本『水滸伝』を入手した。『二刻英雄譜』の一部で、上欄には『忠義水滸伝』、下欄には『三国演義』がある。又の名を『漢宋奇書』ともいう。こちらにはあまり善い版本はないけれども、これはこれで参考になる。もし貴方が自分の代わりに「百回本的忠義水滸傳」（◎を付けて念押しをしている）を訪問して見てくれるなら、喜びで気が狂いそうだ。この本をそのうち貴方に贈呈しようというのである。しかし、それは内閣文庫の貴重本であり青木も実見することはかなわなかった。代わりに、青木は百回本忠義水滸伝の邦訳本を送っている。

胡適は青木宛第八信で、さらにもう一つの要望も出している。

你許我抄録京都府立圖書館的百二十回本水滸全書的目録凡例等，感謝々々！此事不必急々，且等你有閑暇時再做。但我盼望你托你相熟的書店去替我訪求一部百二十回的水滸全書。此書既然内閣文庫与京都府立圖書館皆有収蔵，大概尚不難尋訪。此本（百二十回本）雖不如百回本之重要，但必是狠有用的参考材料。（書價若干，務請你告我、當即寄。）水滸的時代的考定，乃是中國近世文学史上一个重要問題，故我不惜多費時力与精力，務期做一个可靠的考證。

「自分に代わって京都府立図書館の百二十回本『水滸全書』的目録・凡例等を抄録してもらえるなら嬉しい」というのである。この文面からすると、青木の方から元々提案したようにも見える。その青木の書簡だが、やはり耿云志氏・影印本・寄贈写真にはない。さらに胡適はいう、「自分としては百二十回本の現物があれ

ば、その方が助かる。内閣文庫や京都府立図書館にもあるのなら、そう捜せないこともないのでは」と。また「百回本ほど重要ではないが、参考資料としての意義はあるので。代金がいくらか知らせてほしい。自分は『水滸伝』の問題はとても重要と考えているので、時間も経費も惜しまない」ともいう。

依頼を受けた青木は、百二十回本『水滸全書』を求めて奔走した。その結果は、胡適宛第十二信（前掲十，二，十七付）にこう記される。

「水滸」百回若百二十回本，我的意思無論替你熱心訪求，可是此書訪求不然容易。如京都帝國大学支那文学研究室十數年来訪求這書，而至今還搜得不出。你不知道，那内閣文庫是在日本頂富儲蔵稀覯漢籍的文庫，因為這文庫（在東京）徳川氏三百年封建時代官立図書館的遺物，収蔵也自然無比（這文庫不許公衆的閲覧，尤為学界恨事。）京都府立図書館本是偶然訪求得的，君山老師也久所羨望的。可是你不必失望，冀假我若若干的時期，我誓替你訪出来！

概略、「百回本も百二十回本も簡単には手に入らないものです。内閣文庫は徳川時代の図書館なので、一般人が閲覧するのは難しいです。京都府立図書館本は偶然見ることができました。（それを見れないからと）失望には及びません。お時間をいただければ、誓って代わりに私が閲覧致しますので」旨が記されている。私が胡適先生の代わりとなってしっかり閲覧しますという、この誠実さ。そして、約一ヶ月後の胡適宛第十三信（「正兒／十，三，十五夜。」付、便箋は守拙蓬廬の銘入り、縦書き、毛筆、罫線あり、十行、三枚）で、「寄上章氏遺書和水滸百二十回本巻首摘録，料應你已収到了」と記す。青木は結局こつこつと京都府立図書館蔵本を筆写して、胡適に送ったのである。

青木から送られたこれらの版本を並べて、胡適は再び『水滸伝』成立の謎に挑んだ。その考察をまとめたものが、かの「水滸伝後考」である。本論文で胡適は、現在入手している『水滸伝』の版本について、次のように記す（長いので一部を中略する）。

現在我収到的水滸版本有下列的各種：

（1）李卓吾批点《忠義水滸伝》百回本的第一回至第十回。此書為日本岡島璞加訓点之本，刻于享保十三年（西暦一七二八），是用明刻本精刻的。（中略）这十回是我的朋友青木正児先生送我的。

（2）百回本《忠義水滸伝》的日本訳本。岡島璞訳，日本明治四十年東京共同出版株式会社印行，大正二年再版。明刻百回本《忠義水滸伝》現已不可得，日本内閣文庫蔵有一部，此外我竟不知道有第二本了。岡島訳本可以使我們考見《忠義水滸伝》的内容，故可宝貴。

（3）百十五回本《忠義水滸伝》。此本与《三国演義》合刻，毎頁分上下両截，上截為《水滸》，下截為《三国》，合称《英雄譜》。坊間今改称《漢宋奇書》。我買得両種。（中略）此書原本是大字本，有鈴木豹軒先生的蔵本可参考；但我買得的両種都是翻刻的小本。

（4）百二十四回本水滸伝。（中略）此外，還有両種版本，我自己雖不曾見着，幸蒙青木正児先生替我抄得回目与序例的：

（5）百十回本的《忠義水滸伝》。（日本京都帝国大学鈴木豹軒先生的蔵）这也是一種〝英雄譜〟本，内容与百十五回本略同，（中略）可見此書刻于明末或清初，大概即是百十五回本的底本。

（6）百二十回本《忠義水滸全書》。（日本京都府立図書館蔵）这是一種明刻本，有楊定見序，自称為〝事卓吾先生〟之人，大概这書刻于天啓、崇禎年間。

すなわち、青木から送ってもらったことを明記するのが（1）（5）（6）。（5）は書簡の中には言及されないが、併せて同封したものであろう。また胡適は触れないが、（2）も青木からのものに相違ない。前述したように、青木への第八信に「青木先生：謝々你的十，二，三的信，与你寄贈的忠義水滸傳二冊！這両本水滸傳使我非常歓喜」と、二冊の『忠義水滸伝』だったことを明記するからである。胡適は、訳本ながらも百回本『忠義水滸伝』を直接実見できたことで、『水滸伝』成立考を格段に深化させ、版本ごとに即してその過程を詳細に明らかにし得たのである。

なお耿云志主編『胡適遺稿及秘蔵書信』には、青木の第二十信（第十九信も収録せず、寄贈写真で判明。これは大正十二年三月二日便葉書である。第二十信の箋は縦書き、毛筆、唐人写経格の銘入り、罫線五行、ただし実際には八～九行分書いている）の後に、青木が送った直筆資料が添付される。「百十回本／百回本／百廿回本　水滸傳的記載」と表書きされ、そのうち「明刻百二十回本」は縦書き、毛筆、罫線あり十行、版心に守拙蓬廬の銘入り、十四枚ある。末尾に「右明李卓吾評閲水滸全書序凡例目録、以日本京都府立図書館蔵本、摘録。／大正十年二月二十三日／青木正兒」と記される。また「水滸百回本」の方は、同じく守拙蓬廬の便箋で十行の罫線入りのもので縦書き、毛筆、十一枚。末尾に「胡適之先生狠熱心水滸的源流，将来要做一□□全水滸考證，我深感他的高志，寫這調査書給他做一助。／青木正兒　十，四，八。」と記されている。なお影印本では分からなかったが、今回、寄贈して頂いたカラー写真で見ると、随所に打たれた圏点や割り注・上欄注の一部、また感嘆符や〔　〕などの記号が朱であることが確認された。

胡適の青木宛て最後の書簡、第九信（「胡適／十，五，十九。」付、縦書き、毛筆、二十七字×十二行の原稿用紙、三枚）にはこ

うある。

青木先生：

你的信与百十回的水滸傳校記，都已収到了。

今天又接到你恵賜忠義水滸傳譯本，我真不知怎様感謝你好！

我想先把現有的各本水滸傳序例与回目排列一个比較表，然後尋出各本的先後与来歴。這篇『新考證』若做得成，差不多全是你的幇助的結果。

いよいよこれで資料は揃った。あとは比較表を作り、各本の先後や来歴を調べるだけだ。「この〝新考證〟が出来上がれば、すべて貴方のお陰と言ってもよいくらいだ」という言葉に、当時の胡適の思いがあふれ出ている。これらの文献を隅から隅まで考察して、かの「水滸伝後考」という画期的な論文は生まれた。その基本的理解は、今日でも通用する立派なものである。その後変わった大きなことといえば、「明刻百回本忠義水滸伝現已不可得，日本内閣文庫蔵有一部，此外我竟不知道有第二本了」の部分が、後になって日本の内閣文庫本（現在、国立公文書館蔵）や北京図書館蔵などに六種ほどあることが分かったことなどである。[15] けれども、『水滸伝』成立論の基盤を形作った胡適の功績自体は全く揺るぎがない。その意義はきわめて大きい。

胡適は「水滸伝後考」でいう、「我感謝我的朋友青木正兒先生，他把我搜求《水滸》材料的事看作他自己的事一様；他対于《水滸》的熱心，真使我十分感激」と。言葉ではいえないくらいの謝辞なのだが、胡適はその思いを自身の手元にも残しておきたかったと見えて、日記にまでこう書き記している。黄山書社刊の影印本（第十五巻、毛筆、細字、二十七字×十二行）の一九二一年五月十九日の部分にいわく、

作書給沈尹默，青木正兒，周瘦鵑。

青木正兒先生送我一部岡島璞訳的忠義水滸傳。此系根拠百回本的忠義水滸傳作底本的。百回本既不易得，此本可以考見百回本的内容，故很宝貴。此本是明治四十年東京共同出版会社印的。

まさに青木の協力なしにはなし得なかった論文だった。

胡適も青木に深甚の謝意を伝え、そして『水滸伝』を贈呈した。それが「青木文庫」に所蔵される帙入りの百十五回本『水滸伝』（別名『漢宋奇書』、青木の書込なし）である。その表紙には胡適の自筆で「英雄譜二十四冊，中有百十五本的水滸，送給／青木迷陽先生，並謝々他送我岡島訓点本忠義水滸傳的原意　胡適　十，三，二」と署名される。その返事が胡適宛第十四信（便箋は毛筆、縦書き、罫線なし、一枚）で、「胡先生：英雄譜二帙見恵，剛才

収到了。多謝々々！此書我也曾經寓目了。不久我要把這個比較那合刻水滸三國全傳，給你知道他的同異。／正兒　十，三，廿。」という。その後、この『英雄譜』の刻本の成立年代について、二人の楽しい学問談義が数回ほど交わされて行くが、それは二人にしか味わえない至福の時間だった。

おわりに

以上で、中国社会科学院より贈呈された青木博士の胡適宛書簡（写真）と、中村喬氏所蔵の胡適からの青木宛書簡、および本学附属図書館「青木文庫」をもとにした調査報告を終える。

「青木文庫」の胡適贈百十五回本『水滸伝』はだいぶ傷んでいるが、二人の友情は永遠に不滅である。「余も其研究を快として水滸伝に関する多少の資料を送つて応援した事もなどもあつた」（青木「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」附記）という言葉に、お互い最先端の研究に熱中した日々が刻印されている。その思い出は消えることはない。次の言葉がそれを物語る。

彼は後に当時を回顧して『当時朋友との間に一日に端書一葉、三日に封書一本と互いに討論した楽みは、真に人生得易からざる幸福であつた。自分が文学革命に対する一切の見解が結晶して一種の系統的主張を成し得たのは、全く此等朋友と切磋討論の結果であつた』と云つてゐる。

（「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」上）

これは大正九年八月に脱稿した文章だが、その「朋友」の中に青木も加わっていく。そして二人の書簡の交流は、同年九月から同十一年（一九二二）二月まで続く。青木が胡適に直接会ったのは、大正十四年（一九二五）八月二十一日北京の東興楼でのことだった。北京大学の面々（胡適をはじめ沈尹默・沈兼士・陳大斎・馬衡・張鳳挙など）が招待宴を開いてくれたのである。大正十五年九月、青木はその時の印象を次のように記している。

胡君も近年は政治運動に油が乗つて来てゐるらしい。昨年余が北京であつた時なども、政治家の群に伍して夜々宴会廻りを事として居る模様であつた。惜い事だ、政治騒ぎにならば敢て胡君を煩はさなくても他に其人が幾らも有る。但あの明晰な頭脳と機敏な学才とは今の新人中之に代はる人を見出すことは容易で無い。

政治の嵐に巻き込まれていく胡適を見ていて、その学識を心から惜しむのだった。その時の招待状（縦十九・五×横七cm）が、今も「青木文庫」の青木自編冊子「門票」に残っている。楽しい宴席の思い出とそして友への気遣いとともに……。

注

1 名古屋大学附属図書館・文学部中国文学科編（二〇〇七）

2 前稿「中国文学の新時代を拓いた青木正児と胡適の交流―往復書簡および名古屋大学附属図書館「青木文庫」から」『名古屋大学・陝西師範大学国際学術討論会　日中文化交流の歴史記憶と展望』（名古屋大学文学研究科プロジェクト経費成果報告書　二〇〇八・三）を下地に、今夏、中国社会科学院から現物の写真を入手したことにより、かなりの部分を加筆改稿した。

3 『東瀛遺墨―近代中日文化交流稀見史料輯注』（上海人民出版社　一九九九）

4 『飈風』九号（一九七六）、『飈風』十一号（一九七八）。これについては、同僚の井上進教授（東洋史）からご教示を賜り、その複写まで頂戴した。記して感謝申し上げる。

5 『明報月刊』（一九七七・八　香港）

6 耿云志主編（黄山書社　一九九四）

7 北京大学出版社（一九九五）。なお耿云志氏の正式の所属だが、今春、初めて手紙を寄せた時は不明だったので、仮に中国社会科学院近代史研究所に宛てて送った。その後、同所研究員、胡適研究会会長であることを確認。

8 耿云志・欧陽哲生編（北京大学出版社　一九九六）

9 安徽教育出版社（二〇〇一）

10 『青木正児全集』からの引用文は、漢字は基本的に常用漢字に改め、かなは原文のまま旧かなを用いた。

11 『青木正児全集』第二巻『支那文芸論藪』所収。

12 『青木正児全集』第七巻『雑纂』所収。

13 『青木正児全集』第二巻『支那文芸論藪』所収。

14 『胡適文集』（欧陽哲生編　北京大学出版社　一九九八）第二巻　所収。簡体字は基本的に常用漢字に改めた。

15 高島俊男『水滸伝の世界』（大修館書店　一九八七）二三七頁。

附記　中国社会科学院から寄贈された写真は、『中国社会科学院蔵「青木正児博士、胡適宛書簡集」』として、本学附属図書館「青木文庫」に収められることとなり、現在製本中である。近いうちに一般公開される予定である。

Abstract

中国社会科学院藏青木正儿致胡适的书信－与胡适来往书信论

加藤国安

名古屋大学附属图书馆中在过去的三十多年来一直悉心保存着收藏了青木正儿的藏书及资料的「青木文庫」。作出调查，所得的结果不仅对青木的中国文学研究，宏观来看，更对日本近代中国文学研究的诞生经过有了进一步的了解。但有很多资料仍处于探索的阶段，故未能上梓册中。

在调查的过程中，中国社会科学院近代史研究中心成为其中一个重点－理由是因中心多年来保管了青木博士致胡适的书简之故。经过调查人员与中心的意见交流， 名古屋大学附属图书馆获中心寄赠整套书简的相片。在书简中可感受到当日青木博士为了探求合适的近代文学研究方法而作出的种种尝试精神－仿佛至今仍生生不息的跃然纸上。他与当时在北京同样辛苦奋斗，努力不懈的胡适惺惺相惜，切磋琢磨，更不吝的交换了残存于日本的贵重汉籍资料，其欲洒清新的甘露以滋润中国文学研究之构想可见一斑。

二人那充满了热情的友谊对日本近代中国文学研究的曙光到来有着极其重要的意义。故拙稿运用了诸书简资料，阐明了青木・胡适两人进行了如何的书简往来，从而翻开近代中国文学的新一页。与此同时，更不忘分析了二人交流的成果对各自的研究产生了如何的实质影响，以及其在「青木文庫」中透过如何形式而被保存下来等诸真相。